

和服着装に関する研究 (第3報)

— 卒業時における和服の利用について —

豊田幸子・山本寿子

A Study on the Dressing of Japanese Style Clothes(III)

— Use of Japanese Style Clothes in Season of Graduation —

Sachiko TOYODA Hisako YAMAMOTO

緒 言

和服は日本の気候風土のもとに、私達の生活の中で長い間親しまれ、豊かな衣生活と伝統文化の発展にたずさわってきた民族衣裳である。しかし、現代の衣生活において、和服の着装は日常着から儀式や趣味的な着用へと変化している。このような流れの中で、伝統衣裳として、現代生活に適した和服の着装形態について考察し、教育に生かしていきたいと考える。

前報では、女子大生の浴衣と帯の利用¹⁾及び年末年始における和服の利用について²⁾の考察を報告した。引き続き本報では、卒業時における卒業式と謝恩会(卒業記念パーティ、卒業祝賀会ともいわれる。)での和服の利用についての実態を明らかにして検討したので報告する。

方 法

調査対象は名古屋女子大学短期大学部の学生であり、卒業式では平成4~6年度の過去3ヶ年に卒業した生活学科、栄養科、英語科の全クラスの卒業記念写真により調査した。謝恩会では平成4、5年度の2ヶ年は生活学科、栄養科、英語科の全クラスであり、平成6年度では生活学科の生活文化専攻の6クラス(未撮影)を除く全学科の謝恩会写真により調査した。さらに生活学科の服装学専攻及び栄養科と英語科の専攻の特色が異なる三学科における和服の利用度や種類の差の変遷を見るために、昭和60年度から平成6年度卒業生までの10ヶ年における謝恩会クラス写真により調査した。調査内容は卒業式及び謝恩会での服装の種類、和服においてはさらに着装形態及び長着の種類を調査し検討した。

結果及び考察

1. 卒業式の服装のうつり変り

現在の名古屋女子大学短期大学部は昭和25年4月に名古屋女学院短期大学として発足した。昭和26年度第1回卒業生6名は、全員家政科であり学園70年史『春嵐』³⁾には学長の越原春子先生の黒留袖姿と共に全員洋装での卒業写真がのせられている。それに続く2回、3回生までは卒業式の服装は自由な雰囲気であったらしいが、全員家政科で、自作の洋装が可能なこともあり、第4回卒業生から「黒又は紺などの洋装」が最も好ましいとされ、平成3年度の第41回卒業生までには「卒業式の服装について」として学生部長より次の文章によるプリントが渡さ

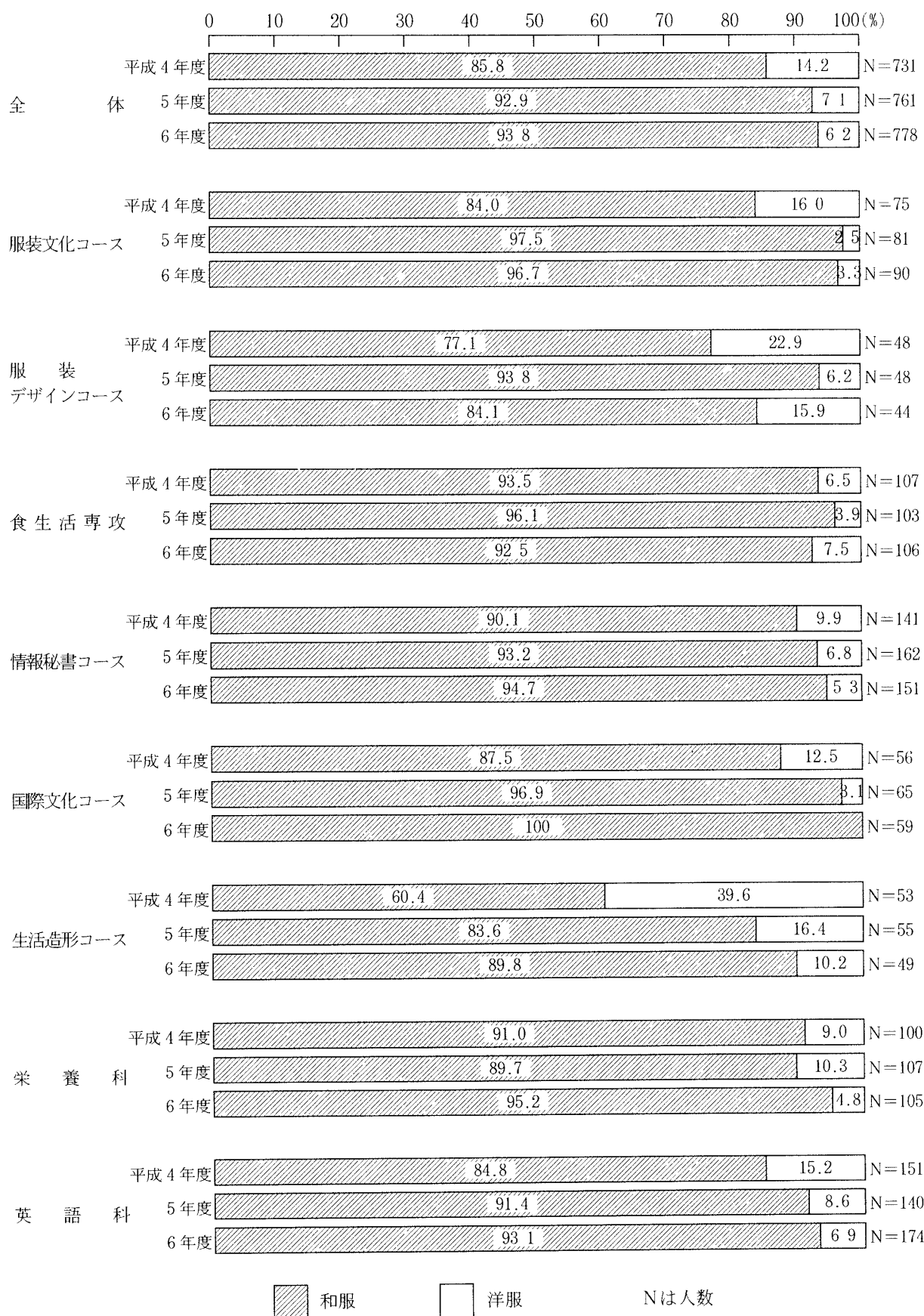


図1 卒業式における全体及び学科・専攻・コース別服装の種類

れている。「卒業式の服装は、今春卒業予定諸姉が、すでに了解されているように、“黒又は紺などの洋装”で、学生らしい気品のある清楚さを備えたものを着用することになっています。この服装は、名女大第4回卒業生以来今日まで、ずっと受け継がれてきているもので、本学の建学の精神のあらわれのひとつとして理解されています。名女大生として巣立っていく諸姉が、このように時流を越えてきた伝統の意義を改めて認識されることを期待します。なお、万が一、この了解事項を違えた場合、卒業式の参加を遠慮してもらいます。」しかし、昭和39年4月に名古屋女子大学が開学、家政学部が設置され、さらに昭和63年4月には文学部が増設された。一方、短期大学は短期大学部となり、創設以来の家政科に加えて昭和37年4月に服飾科と栄養科が増設されたが、昭和57年には服飾科に変わって英語科が加わった。このような学部や学科の変遷の中で、大学と短期大学部合同で毎年行われる卒業式には数人の和服着用者があとをたたなかった。このような現状をふまえて、学内でも色々と議論された結果、平成4年10月には「卒業式の服装について」として学生部長より次の文章による掲示が出された。「従来本学では卒業式における服装は“黒又は紺などの洋装”でしたが、平成4年度卒業式には、卒業式に相応しい服装でご出席ください。」このような経過で名古屋女学院短期大学での昭和29年度の第4回卒業生から名古屋女子大学短期大学部平成3年度の第41回まで38年間続けられた卒業式の服装としての「黒又は紺などの洋装」の伝統に終止符が打たれたのである。

2. 卒業式における和服の利用

以上のような現状における卒業式において、短期大学部の全学生による服装の着装状況の結果を図1に示す。平成4年度から6年度までの過去3年間の卒業写真により、まず和服と洋服の割合を学科、専攻、コースに分けて図にした。

なお服装文化コースは和服と洋服の被服構成実習の授業を有し、服装デザインコースは洋服のみ、食生活専攻は教職課程を選択する学生を含めて各年度により約18~43%が被服構成実習を履修しており、その他の学科やコースでは被服関係の実習はない。

過去3年間で各年度全体でみると、平成4年度卒業生731名のうち和服の利用は約86%、5年度は761名のうち93%、6年度は778名のうち94%と年々増加しており、女子大生の卒業式には着物と袴の組合せという着装のイメージが定着している事がうかがえた。しかし、学科、専攻、コース別でみると、変更があった最初の平成4年度では生活造形コースが53名のうち約60%、服装デザインコースでは48名のうち約77%と全体平均の約86%よりかなり低い和服の利用度であり、その後3年間の和服利用率平均約91%に対しても生活造形コースは約78%、服装デ

表1 卒業式における着物の種類

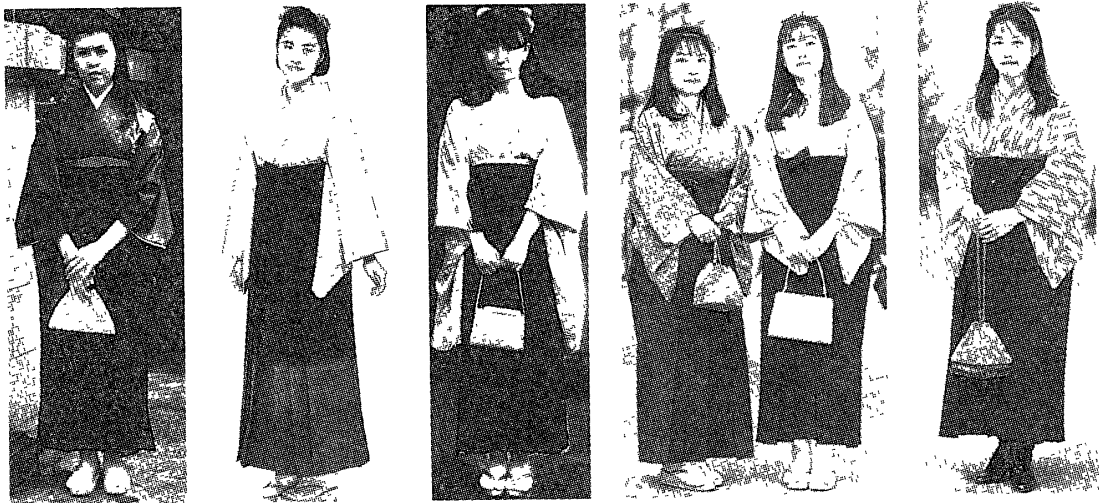
着装形態 着物 年代	着 物		着 物 + 袴						合 計
	振 袖	色 無 地	振袖・付下げ類 ・訪問着	黒 紋 付	色 無（花紋） 地	色 無 地	小 紋	矢 絁	
平成4年度	5 (0.8)	—	58 (9.2)	2 (0.3)	25 (4.0)	467 (74.5)	31 (5.0)	39 (6.2)	627 (100)
平成5年度	3 (0.4)	—	65 (9.2)	4 (0.6)	40 (5.7)	515 (72.8)	34 (4.8)	46 (6.5)	707 (100)
平成6年度	1 (0.1)	1 (0.1)	90 (12.3)	9 (1.2)	41 (5.6)	496 (68.0)	42 (5.8)	50 (6.9)	730 (100)



A 振袖 B 色留袖 C 訪問着・付下げ D 色無地 E 小紋



F 振袖+袴 G 留袖・黒紋付+袴 H 左は色無地(花紋)+袴 右は小振袖+袴 I 訪問着+袴



J 付下げ+袴 K 色無地+袴 L 左は小紋(長袖)+袴 中と右は小紋+袴 M 矢絰+袴

参考文献：G・I・J L(左)は「美しいキモノ」127号，Eは147号，A・Kは159号，Dは162号，B・C(左)は163号，F・H・L(中・右)・Mは167号，C(右)は169号

図2 卒業時における着物の種類

ザインコースは85%と低率であった。又逆に、国際文化コースでは3ヶ年ともに56名のうち約88%，65名のうち97%，59名のうち100%と和服の利用が最も多かった。

次に卒業式での和服利用者の着物の種類を表1に示す。和服の利用者は平成4年度627名，5年度707名，6年度730名であった。その人達の着装形態は“振袖”や“色無地”の着物が各年度によって2名から5名の0.2～0.8%とわずかにみられ，その他は着物と袴の組合せが99.2～99.8%と多かった。着物と袴の組合せにおける着物の種類は“振袖”，“訪問着”，“付下げ”，“黒紋付”，“色無地（花紋）”，“色無地”，“小紋”，“矢絣”の8種類がみられたが，卒業写真の場合では2列目や3列目に写っている学生の場合は袖の長さが見えない場合があったり，袴から上部の柄しかわからず“振袖”，“訪問着”，“付下げ”の判断がしかねる場合もあったので，それらはまとめて集計した。その結果は“色無地”との組合せが最も多く，各年度ともに68～74.5%と高率を示した。次いで“振袖・訪問着・付下げ類”が9.2～12.3%，“矢絣”が6.2～6.9%，“小紋”が4.8～5.8%，“色無地”に花紋が前身頃の左右についた着物が4.0～5.6%，“黒紋付”が0.3～1.2%の順であった。卒業式に出席するというフォーマルな格式の意識があり，“色無地”の着物が特に高率を示したと思われるが，最近では色無地で振袖の着物もあり，写真での後列に写っている場合には振袖の方では集計できなかった人も含まれていることをお断りする。又，この色無地振袖の背縫いに“花紋”が入り，素材はシルック（化繊）で色数も多くとりそろえた貸衣裳もたくさん出まわっている。なお以上の着物の種類の着装写真を次に述べる謝恩会の着物の種類とあわせて雑誌「美しいキモノ」より選び，卒業時における着物の種類として図2に示す。

3. 謝恩会における和服の利用

次に卒業式とほとんど同時に行う謝恩会における和服の利用について，前述した同じ卒業生の平成4～6年度の過去3ヶ年を謝恩会クラス写真よりみた全体の集計を卒業式の全体とあわせて図3に示す。謝恩会は全員出席するものではなく，卒業式クラス写真の人数に比較して平

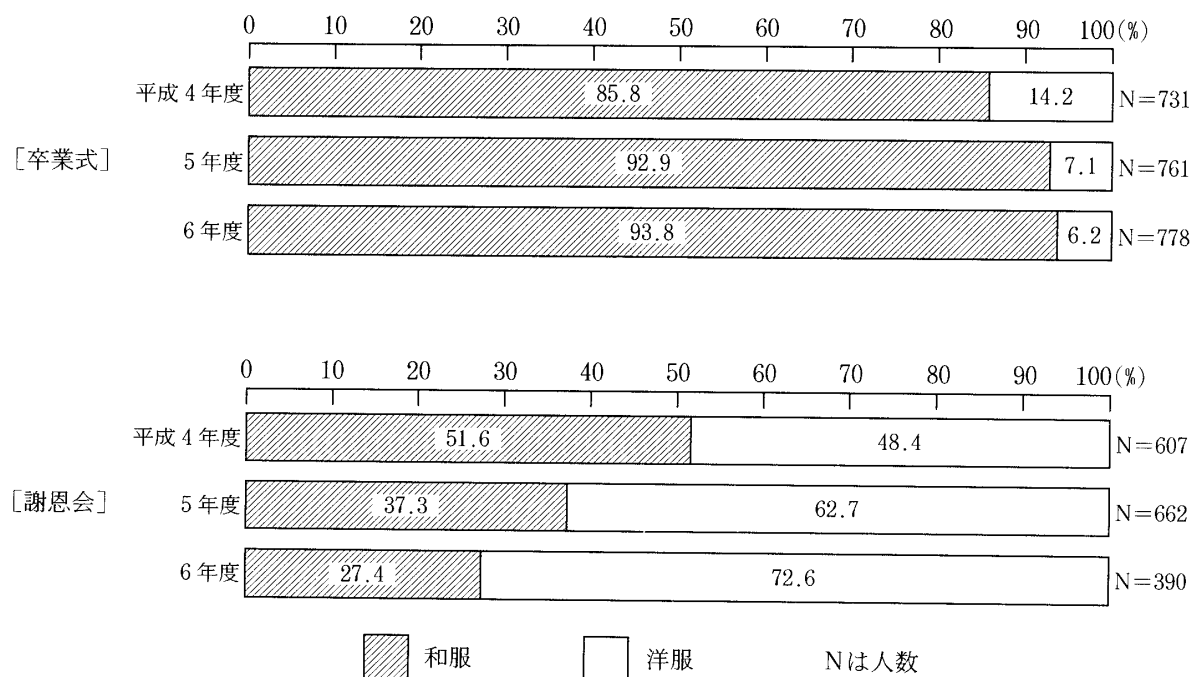


図3 卒業式及び謝恩会における服装の種類

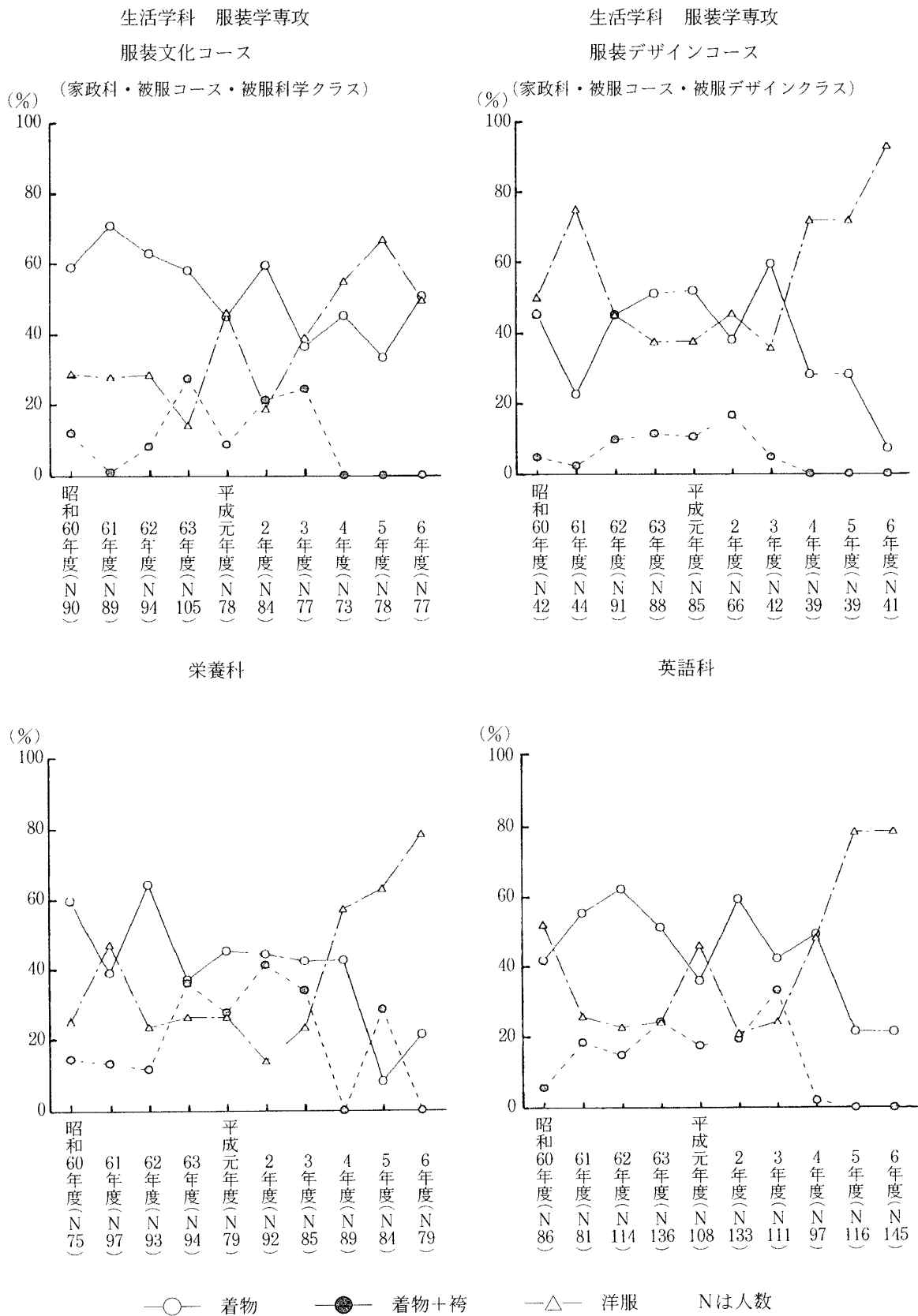


図4 謝恩会における学科, コース別服装の種類

成4年度ではマイナス124名の607名、5年度ではマイナス99名の662名、6年度では生活学科の生活文化専攻の6クラスは謝恩会クラス写真の撮影がなくマイナス388名の390名での調査である。謝恩会は卒業式当日あるいは2～3日ずらせた前後の期間に行われている。平成4年度から卒業式での服装は和服でもよいことになった為か、謝恩会での和服の利用は平成4年度から順に51.6%、37.3%、27.4%と年々減少しており、逆に洋服の利用が平成4年度から順に48.4%、62.7%、72.6%と増えている。卒業式では3ヶ年では約86～94%の学生が着物と袴の和装で出席し、謝恩会ではおもいきりドレスシーなパーティドレスか気軽なスーツの洋装でというパターンがみうけられた。

次に謝恩会の服装を学科、専攻、コース別に過去10年間の昭和60年度から平成6年度までの謝恩会クラス写真より調査した。服種は和服の“着物”の着装と“着物と袴”の着装それに“洋服”の3種類にわけて集計し図4に示す。生活学科の服装学専攻は服装文化コースと服装デザインコースに別れるが、平成1年度以前は家政科の被服コースで被服科学クラスと服飾デザインクラスに別れていたクラスが平成2年度から名称変更したものである。昭和60年から平成2年度卒業生までの被服科学クラスでは1、2年生での2年間に和裁と洋裁両方の被服構成実習を修了し、和服方面の卒業研究を選択した学生は振袖、留袖やそれに合せた袋帯まで製作して謝恩会に出席している。平成3年度卒業生からの服装文化コースでは、和裁の構成実習は必修の1年生のみとなり、6年度の卒業生では1年生での和裁も選択となり、和裁を全く履修していない学生も約20%いる。服装デザインクラスではアパレル企業への人材教育を目指しての2年間の被服構成実習の時間数も多く、卒業時には式服のスーツ類やフォーマルドレスも製作して謝恩会に出席している。栄養科では昭和37年の創設以来栄養士の育成を1本に目指している。英語科は昭和57年の創設で歴史は浅いが、実用英語の養成を目指し、国際社会で活躍する人材を育成している。以上の目的の異なった4つの学科、コースの謝恩会における服装の10年間の流れをみると、平成4年度の卒業式の服装に和服が可能になった年を境に傾向が変わる。昭和60年度から平成3年度の7年間では、卒業式の服装が洋服であるために謝恩会では和服が服装デザインコースの平均では約67%とやや低率であるが、他の学科やコースでは約80%と高率であった。平成4年度からは図3でも述べたように、洋服の着用が多く、平成6年度では服装デザインコースの約93%、栄養科、英語科も約79%であるが服装文化コースでは49.4%とやや低率である。このように服装文化コースでは和服着用者がやや多かったのは入学の時点から和服に関心を持っており、和服に関連した講義や実習も経験していることもあり、卒業式と謝恩会両方での和服の利用が多いと考える。和服のうち、着物と袴の組合せは平成3年度までは服装デザインコースの年度平均8.6%という低率を除いて他では平均14.9～25.6%のほぼ同傾向に着用がみられるが、平成4年度からはほとんど着用がみられないのに、平成5年度の栄養科に28.6%もみられた。これは謝恩会が卒業式当日に行われており、着替える時間がなかった為ではないかと考えられる。

次に、前述の服装文化コース、服装デザインコース、栄養科、英語科における昭和60年度から平成6年度までの謝恩会での和服利用者の着物の種類を表2に示す。和服の利用者は平成6年度の90名から昭和63年度の317名と各年度により差がみられる。着装形態は“振袖”、“色留袖”、“訪問着”、“付下げ”、“小紋”等の着物の着装が61～100%と高率を示した。着物と袴の組合せは各年度により1.5～39%みられ、卒業式に着用できなかった着物と袴の組合せによる着装を謝恩会というフォーマルな席までもにぜひ着装してみたい願望があったようである。着物と袴の組合せにおける着物の種類は“振袖”、“訪問着”、“付下げ”、“黒紋付”、“色無地（花紋）”、

表2 謝恩会における着物の種類

人数(%)

年代	着物				着物 + 袴						合計
	振袖・ 訪問着 付下げ類	色留袖	色無地	小紋	振袖・ 訪問着 付下げ類	黒紋付	色無地 (花紋)	色無地	小紋	矢絰	
昭和60年度	152 (83.5)	—	—	1 (0.5)	3 (1.7)	—	—	18 (9.9)	1 (0.5)	7 (3.9)	182 (100)
昭和61年度	154 (82.8)	—	1 (0.5)	1 (0.5)	1 (0.5)	—	—	26 (14.0)	—	3 (1.7)	186 (100)
昭和62年度	229 (83.0)	1 (0.4)	—	1 (0.4)	2 (0.7)	—	—	26 (9.4)	5 (1.8)	12 (4.3)	276 (100)
昭和63年度	211 (66.6)	—	—	—	—	2 (0.6)	3 (0.9)	71 (22.4)	11 (3.5)	19 (6.0)	317 (100)
平成元年度	154 (73.0)	—	—	—	5 (2.4)	—	2 (0.9)	39 (18.5)	5 (2.4)	6 (2.8)	211 (100)
平成2年度	195 (67.7)	—	—	—	7 (2.4)	—	5 (1.8)	57 (19.8)	9 (3.1)	15 (5.2)	288 (100)
平成3年度	136 (61.0)	—	—	—	7 (3.1)	1 (0.5)	6 (2.7)	62 (27.8)	6 (2.7)	5 (2.2)	223 (100)
平成4年度	130 (98.5)	—	—	—	—	—	—	2 (1.5)	—	—	132 (100)
平成5年度	68 (73.1)	—	1 (1.1)	—	4 (4.3)	1 (1.1)	2 (2.1)	14 (15.1)	3 (3.2)	—	93 (100)
平成6年度	89 (98.9)	—	—	1 (1.1)	—	—	—	—	—	—	90 (100)

“色無地”，“小紋”，“矢絰”の8種類がみられた。なお、この場合も卒業式の場合と同様に“振袖”と“訪問着”，“付下げ”はまとめて集計した。着物と袴の組合せでの着物の種類は“色無地”が最も多く、平成3年度では27.8%と高率であった。次いで“矢絰”，“小紋”，“振袖・訪問着・付下げ類”，“色無地（花紋）”，“黒紋付”の順であった。以上の着物の種類の着装写真を図2のAからEに，着物と袴の組合せをFからMに示す。

要 約

女子大生の卒業時における卒業式と謝恩会での和服の利用について調査した結果，次のことが把握できた。

- 1 卒業式の服装は「黒又は紺の洋装」という伝統が解除された名古屋女子大学短期大学部全学生の平成4～6年度における卒業式での和服の利用は平成4年度卒業生731名のうち約86%，5年度は761名のうち93%，6年度は778名のうち94%と年々増加している。和服利用者の着装形態は着物と袴の組合せが99.2～99.8%と圧倒的に多かった。袴と合せる着物の種類は“色無地”が各年度ともに約68～75%と多かった。
- 2 謝恩会での和服の利用は平成4年度の卒業生607名のうち51.6%，5年度は662名のうち37.3%，6年度は390名のうち27.4%であり，年々減少している。さらに昭和60年度から平

成6年度までの過去10年間では、卒業式の服装が洋装と決められていた昭和60年度から平成3年度までは約67～80%と高率であった。和服の着装形態は“振袖”，“色留袖”，“訪問着”，“付下げ”，“小紋”等の着流しが年度平均61～100%と高率であり，着物と袴の組合せは1.5～39%と少なかった。着物と袴の組合せでの着物の種類は“色無地”が最も多く，次いで“矢絰”，“小紋”等であった。

以上の結果をふまえて，今後国際社会において活躍する女子大生達にふさわしい和服教育と研究をさらに深めたいと考える。

稿を終えるにあたり，卒業式及び謝恩会のクラス写真を快くおかしいただきました諸先生方に深謝致します。

参 考 文 献

- 1) 豊田幸子，山本寿子：名古屋女子大学紀要 家政・自然編，**40**，15～22（1994）
- 2) 豊田幸子，山本寿子：名古屋女子大学紀要 家政・自然編，**41**，55～64（1995）
- 3) 学園七十年史編集委員会：春嵐，462，一誠社（1985）
- 4) 婦人画報社：美しいキモノ，127，85～87（1984）
- 5) 婦人画報社：美しいキモノ，147，461（1989）
- 6) 婦人画報社：美しいキモノ，159，148～149（1992）
- 7) 婦人画報社：美しいキモノ，162，437（1992）
- 8) 婦人画報社：美しいキモノ，163，155（1993）
- 9) 婦人画報社：美しいキモノ，167，252～253（1994）
- 10) 婦人画報社：美しいキモノ，169，283（1994）